

うちはサスケだけど、闇堕ちしたくないです.....

お

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うちはサスケに転生した主人公が闇堕ちしないように尽力します。
現在プロット練り練りしてます。すみません。

目次

プロローグ

その世界は、他のどの世界より、破滅的で、残酷で、どうしようもない世界だった。

ようやく自分のアパートについた僕は、早く寝ようと急いでシャワーを浴び、着替えて、歯を磨いていた。

ふと本棚を見ると、僕が初めてハマった漫画の「NARUTO」が目についた。学生時代はこの本を何度も何度も読んでいたなあ。

最近仕事が忙しくなってしまう、趣味に掛けられる時間はほとんどなくなってしまうが、充実した日々を送るのはとても心地よく、将来への希望がある。(ちよつとブラックだが)

明日は待ちに待った日曜日、僕はその日だけは趣味に費やすと決めている。もう一回NARUTOを読み直すのも良いかもしれない。

NARUTOの登場人物は誰もが格好よく、僕はこの漫画で隠れ中二病を発症させた。……思い出したくない。

ベットに潜り込む。明日は5時半に起きる必要がない。疲れた身体を休めて、明日はあの漫画を読もう。

この時はそう思っていた。

気付くと、僕は暗い空間に浮かんでいた。

夢だろうか？ とても疲れていたから滅多に見ない夢を見ているのかもしれない。

身体感覚はなく、流されるままに空間を漂っていた。

暫くすると、空間全体が揺れ始め、意識が薄れていく。

自分の身体が動き始めたときには、既に意識を手放していた。

起きると、そこは簡素なベットのの上だった。
体は重く、目は霞んでいる。

その上、体の中心に何だか奇妙な熱の塊があるように感じられる。
おいおい、今日は日曜日だぞ？ もっとテンションを上げないと。
声を出そうとしたが、呂律が回らずに、「ふへあ〜」という声が出た。
そばには人がいたようで、起きた僕に気付くと、何やら言いながら
どこかにいつてしまった。

え？ 何でいるの？ ここは病院か？ 明日の会社行けるかな
あ……

その時に見えた、その人の背中に描いてあった卓球ラケットのよう
なマーク、どこかで見たことがあるような気がする。

眠い。 猛烈に眠い。

人が部屋に走り込んできたときには、もう眠りに落ちていた。

4、5日寝ては起きてを繰り返し、僕は一つの結論に達した。

僕は赤ちやんだ。(混乱)

しかし、そうとしか思えないのだ。

体は動かない、他の人が妙に大きい、声が出ない。

これはもう確定だ。

更に、この夢が夢でない可能性が出てきた。

皆は夢の中で寝たことはあるか？

僕はない。

あと、授乳時に嫌がって手足をバタバタしたらどこかに当たり、と
ても痛かった。

自分がどうなってしまったのか不安で、心配だ。

でも、やることもないし、授乳↓寝る↓起きる↓授乳 を繰り返し
ていく。

また、寝ている間に場所が変わったようで、僕は布団に寝かされる

ようになった。

90日(昼と夜を数えた)ほど過ぎると、僕はものがよく見えるようになり、あることに気づいてしまった。

あれ？ あのマーク、うちは一族じゃね？

これが夢である可能性が高くなってきた。そうに違いない。そうであってほしい。

認めたくないが、僕はNARUTOの世界に生まれ直してしまったようだ。

嫌だ。こんな殺伐した世界に居たくない。

元の世界に戻りたい。 仕事したい。

しかも、うちはつて滅ぼされるじゃん。子供含めて。うちはイタチに。

詰んだ、終わった。

はは、人生オワタ……

次の日、僕のところにも母親らしき人と五歳ぐらいの子供が来た。

彼らは布団の横に座ると、僕を抱き上げた。

「サスケ、貴方のお兄さんですよ」

と、母親が言うと、僕をその男の子に近づけた。

「うん、…… 君の兄になるイタチです、よろしく」

その男の子は妙に理知的な挨拶をしてきた。

僕は動けなかった。

あの、イタチだ。 対して、僕はサスケだ。

「どうしたの、サスケ？」

固まったままの僕を心配した母親が何か言ってきたが、聞こえない。

僕は気を失った。

それから何日か経ち、僕が冷静になった頃。

僕は、自身が進むことになる血塗られた道を再確認していた。

うちはサスケは主人公のライバル的存在で、かなりブラックな道を歩む。

幼い頃に兄がうちは一族を滅ぼし、天涯孤独になる。

復讐を誓い、その為だけに里を抜け、大蛇丸の下へ行く。

そのあとも危険な橋を何度もわたり、最終的には主人公の敵になる。

このように、このまま行くと僕も血で血を洗うような所へ行くのだろう。

ダメだ、命がいくらあっても足りない。絶対に死ぬ。

それを回避する為に、今から行動し始めなければ。

もう帰りたい。